転生したら、
なんか頼られるんですが 2

ALPHA LIGHT

猫月晴
Nekozuki Haru

アルファライト文庫

登場人物紹介
ルテエナ
エルの同級生。
真面目で友達想い。
黒髪ぱっつんヘアが
チャームポイント。
ゼラード
魔法学校の先輩。
いつもふざけているが、
実は成績優秀な優等生。
ルフェンド
エルの兄。
ちょっぴりヘタレだけど
心優しいお兄ちゃん。
セイリンゼ
エルの姉。
勝気で頼りになるお姉ちゃん。
魔法が得意。
ウォン
魔の森で出会ったドラゴン。
怪我をしているところを助け、
仲良くなる。
ウィンス
帝国の宰相。
愛国心が溢れるあまり、
ときに空回りしてしまうことも。
ルシア
エルの同級生で
アドラード王国の第一王子。
キラキラオーラ満載のプリンス。
エルティード(エル)
本作の主人公で元・社畜社員。
常識外れな能力で
いつもやりすぎてしまうのが悩み。
魔法学校に通うため成長魔法で10歳の姿に
変身しているが、本当は5歳。

1

仕事帰りにトラックに撥ねられ、命を落としてしまった俺――江崎塁は、なんと異世界転生し、愛らしい三歳児のエルティード・レシス・アドストラムに生まれ変わってしまった。

社畜として働く毎日から一変、優しい家族に囲まれ、幸せに暮らしていたのだが、どうやら俺には規格外の能力があるようだ。

普通だと思って、超効能ポーションを作ったり、即席で魔法を創造したりしていたら、周囲の人たちから、頼られまくってしまい、平穏とはほど遠い賑やかな日々になってしまった。

しかしそんな状況も楽しんで、異世界ライフを謳歌している。

学園にも入学し、あまりにもフリーダムな授業内容に驚きつつ、友人たちと楽しい学園生活を送る毎日だ。どうかこれ以上、トラブルが起きませんように……そう願う俺だったけど、そんなわけにもいかないようで――

◇　◇　◇

俺は夏の長期休暇を利用し、同級生ルシアの家に遊びにきていた。
ルシアはアドラード王国の王子でもある。
他の同級生もまじえて楽しく過ごしていたのだが、突然部屋を訪れた従者によって家に帰るよう促され、辺境の家に帰ってきた。
辺境伯である父様は「……急用ができた」と言い残してどこかへ出かけてしまったし、このアドラード王国で何か緊急事態でも起こっているんだろうか。
ただ事ではない雰囲気の中、俺は何もすることができず、家の中でおとなしくしていた。
本を読んだりしようにも気が向かず、ただ椅子に座ってボーッとしてしまう。王宮の人たちは随分焦っているようだったけど、一体何が起こったのだろうか。
別のことをしようとしても、そのことが気になってどうにも落ち着かない。その上、ずっと妙な胸騒ぎがするのだ。
「父様、心配だなぁ……」
父様があんなに焦った表情をするだなんて、どれほどまずい事態なのだろう。
剣まで帯びていたし、どこかで魔物の異常発生でもあったのかもしれない。
でもその程度であれば、王宮があそこまで騒がしくはならないはずだ。ギルドはドタバ

タするだろうけど。
考えても仕方ないとわかっていても、何もしていないとそのことばかり考えてしまう。
今日は早めに寝よう。
メイドのラディアに夕食を早められないか頼んでこようかな。この時間なら、ラディアは庭で水やりをしているはずだ。
そう思って、重い腰を上げて部屋を出た。
俺の部屋から庭への最短ルートである裏口から外へ出る。しかし木々や花の間に、ラディアの姿は見当たらない。
「ラディア、いる？」
そう呼んでも返事はなく、庭は静まり返ったままだ。ラディアが普段どおりの行動をしないのは珍しい。
不思議に思いながら部屋に戻ろうとすると、居間のほうから微かに話し声が聞こえてくることに気付いた。
もしかして、ラディアは居間にいるのだろうか。
確認のため耳をそばだてる。
「――大丈夫ですよ奥様、きっと無事にお帰りになりますよ」
聞こえてきたのは確かにラディアの声だったが、何やら深刻な雰囲気だ。

「でもなんだか、嫌な予感がするのよ。私の勘は昔から外れないわ、残念なことにね」
「奥様……」
壁の向こう側ではラディアと母様が話しているようだった。
おそらく話の内容は、父様についてのことだろう。盗み聞きはよくないとその場を立ち去ろうとしたが、続きが聞こえてしまった。
「あの子に、エルに何か起こるかもしれないわ。何故だかは全くわからないし、ただの気のせいであることを祈るけれど……そんな気がするの。変ね、あの人が心配で気弱になってるのかしら」
そう言う母様の声は心配のためか、かなり元気がないように感じた。
俺は今度こそ、その場を去ろうとする。
しかし、柱が俺の動きを阻んだ。正確に言うと、足の小指を柱の角に思いきりぶつけたのだ。
靴は履いていたのだが、薄手のものだった上、とんでもない勢いでぶつけたため、あまり意味はなかった。
「痛ったぁ！」
一拍遅れてそう叫び、あまりの痛さに足を抱えた時点でやらかしたことに気付いた。
居間のほうから二人分の足音が聞こえてくる。

「どうしたの、エル！」
「何かありましたか！」
「足を柱にぶつけただけです……」
駆け寄ってきた母様とラディアに申し訳なくなりながらそう言うと、二人は表情を緩めた。
「それならよかったけど、気を付けなさいね」
母様はそれだけ言って俺の頭を撫でると、再び居間へ戻っていった。
どうやら俺に何があったのかに気を取られて、話を聞かれていたかもしれない、ということまでは気が回らなかったようだ。
ホッとしたところで、まだラディアがいたことを思い出す。
「エル様、何か聞きましたか？」
ラディアはスッと目を細めてそう言う。
首を横に振ると、ラディアは「盗み聞きはいけませんよ」と言い残し、居間に歩いていってしまった。一人取り残された俺は、背筋が凍る思いだった。

父様が深刻な顔をして俺を呼び出したのは、その日の夜だった。
日が暮れる前に父様が帰ってきたことに安心したのも束の間、普段俺たちには見せない

ような余裕のない表情に、何事かと不安になる。
父様は「話がある」以外何も言わず、ずんずん書斎のほうへ歩いていってしまうので、余計に不安が煽られる。
書斎に入って扉を閉めたところで、父様がやっと口を開いた。
「エル、すまない」
父様はそう言って深く頭を下げた。脈絡のない言動に混乱する。
「え？　父様、何がですか？」
「本当にすまない。先に謝らせてほしい」
俺の言葉を遮って、父様は本当に申し訳なさそうな声でそう続けた。
父様は普段、人の話を遮るようなことはしない人だ。そこまでして何を俺に謝罪することがあるというのか。
父様はやっと顔を上げると、困惑している俺の顔を見た。
「私もできるだけのことはした。でも、無理だった」
聞いたことがないような弱々しい声で、そう言う父様。いつまでも告げられない結論に、不安が募る。
「一体何があったんですか？」
急いた気持ちのせいで、心なしか言い方が強くなってしまったかもしれない。これではいけないと、なんとか心を落ち着かせる。
「エル、お前を帝国に行かせることになった」
「え？　……どういうことですか？」
急にそれだけ言われても、事情を知らない俺にはさっぱりわけがわからない。
父様は深呼吸をしたあと、真剣な面持ちで、何があったのかを話し始めた。
まず昼間。
俺がルシアたちと呑気に遊んでいた頃、突如ラムダ帝国が攻め込んできた。この数十年間、帝国との間に大きなトラブルはなかったのにだ。
父様は、アドラード王国の国王であり自身の弟でもあるヴァルドに頼まれて、急いで帝国との国境、攻め込まれた場所へ交渉に向かった。
国王は今戦うべきではないと考えていた。
帝国と王国の戦力はほとんど互角だが、相手に先手を打たれている以上、王国側が若干不利な状況にある。
多少こちらに不利な条件になっても、交渉を成立させ、戦いをやめるべきだと思っていた。
しかし、帝国が出してきた条件は、国王の想定外のものだったらしい。
「帝国が提示してきた条件は、白髪に紫の瞳を持つ美しい子供を引き渡すこと。そんな特

徴的な容姿は、おそらくこの国に一人しかいない。エル、お前のことだ」

王都の危機を救った、白髪に紫の瞳を持つ美しい子供。

帝国の交渉人はそう言ったらしい。

最後の美しい云々は置いておいて、そんな条件に当てはまるのは俺一人だけだろう。

それを聞いた父様は、驚き混乱した。俺が常識外れな力を持っているとはいえ、たったそれだけのために、何故あれほどまでの軍勢で攻め込んできたのか、わからなかったからだ。

父様は遠回しに理由を探ろうとしたが、帝国はただ『白髪の子供を渡せ』の一点張りだったそうだ。

父様はそれを国王に報告し、国王は俺を帝国に引き渡すという決断を下したのだ。

いつもおちょくってくるから内心では国王のことを馬鹿王と呼んでいるとはいえ、馬鹿王にとって、俺は比較的可愛い甥であり、そこそこ有用な人材だ。

きっと苦渋の決断だったに違いない。

「本当にすまない。謝ったってどうにもならないことはわかっているんだ。でもせめて、謝らせてほしい」

どう返答すべきかわからず、不自然に間が空いてしまう。

父様も、まだ幼い息子を攻め込んできた帝国に渡すなんて、不安と申し訳なさでいっぱ

いなはずだ。

大抵のことは魔法で解決できると思うけど、俺だって攻め込んできた国に行くのは怖い。でも、こんな暗い空気で別れたくはなかった。

「大丈夫ですよ父様！　絶対無事に帰ってきます！　僕強いし！」

必死で言葉を探した末、出てきたのはひどく子供っぽいものだった。それでも父様は、少しだけ笑ってくれた。

◇　◇　◇

その翌日、俺は帝国へ向かうため、一旦父様と二人で王宮に行くことになった。

「やぁエル君。ゼルンドからもう話は聞いたかな」

王宮へ転移するなり、待ち構えていた馬鹿王にそう言われる。馬鹿王は心配になるぐらい顔色が悪く、長時間頭を悩ませていたであろうことが見て取れた。

「帝国が、白髪の子供を、僕を渡せって言ってきたんでしょう」

極力感情を出さないようにしてそう言うと、馬鹿王は眉を下げて苦笑した。

「……本当にすまない。あくまで決定権は君にあるから、もし本当に行きたくなければ言ってくれ」

「そんなの……あってないようなものじゃないですか」
俺は冗談のつもりだったのだが、馬鹿王はそうとは捉えてくれなかったようで、黙り込んでしまった。流石にこんなシリアスな場面で、冗談を言うもんじゃなかった……
慌てて冗談だと伝えようとするも、やっと口を開いた馬鹿王の言葉に遮られる。
「そのとおりだね。君には心から申し訳ないと思っているんだ。子供を敵国に一人で向かわせるだなんて、人としてあるまじき行為なのも理解している。もし君に何かあったら……いくら恨まれても仕方ない決断だ」
馬鹿王が暗い顔でそんなことを言い始めるので、俺は冗談だと言うタイミングを完全に失ってしまった。
今更後悔してももう遅い。
俺の後ろにいる父様は一言も言葉を発さないし、場が重苦しい雰囲気に包まれる。
「僕は誰のことも恨んでないし、仕方ないってことも十分理解してますから。だから大丈夫です。せめて見送りぐらい、明るい空気の中でしてください！」
暗い空気に耐えかねてそう言うと、父様と馬鹿王はやっと顔を上げてくれた。
「そうだな、エルの言うとおりだ」
「これじゃ、君のほうがよっぽど大人みたいだ」
二人は無理やり笑顔を作ってそう言った。

そういうわけで、俺は今現在帝国に向かっている。
帝国側に俺の能力を知られるのはあまりよくない気がするし、いつも強力な魔法をうっかり使っては怒られているので、流石に転移魔法で移動するのはやめて、馬車で移動している。帝国までは馬車で一週間ほど。
俺に配慮して、馬鹿王が上等な馬車と速い馬を貸してくれたのだが、それでも長い間ずっと馬車に乗っているのはなかなかにキツい。
長時間揺られているせいで、お尻がズキズキと悲鳴を上げている。
しかし硬い座面と凸凹の道に心の中で罵詈雑言を浴びせている間にも、着々と帝国へ近付いているのだ。
そう考えるとまた不安になるので、心の中で文句を言うことに徹した。
そうこうしているうちに、目的地である帝国の城が見えてきてしまった。紛らわせていた不安がぶり返す。
帝国の城は王国の華美なものとは違い、要塞のような質実剛健な印象だ。角ばったその見た目が、俺の不安をより煽る。
心を落ち着けようと目を瞑って背中を丸めた。景色の変化も時間の経過もわからない中、ふと馬車が止まった。

御者から到着したと声をかけられ、目を開く。それと同時に外側から扉が開けられた。
扉が開ききる前に、正面から大勢の朗らかな声が飛んできた。
「ようこそ、聖女様！」
「……へ？」
信じられない光景に、喉の奥から素っ頓狂な声が漏れる。
なんとまだ早朝だというのに、俺がいる馬車から城の扉まで長いカーペットが敷かれ、その両脇にはニコニコと笑みを浮かべている人たちがざっと数十人、ずらりと並んでいたのだ。先ほどの声はこの人たちのものだろう。
カーペットの側は色とりどりの花で豪華に飾り立てられ、奥にいる音楽隊は楽しげな音楽を奏でている。
どこからどう見ても、完璧なまでの歓迎ムードだ。
俺は敵国に引き渡されたはずなのに、これは一体どういう状況なのだろう。その疑問だけが、俺の脳内を占めていた。
理解の範疇を超えまくっている状況に、文字どおり言葉を失う。頭がクラクラする。
混乱しながら目の前の光景を眺めていると、群衆の中から一際身なりのいい女性とツルピカの禿げ頭の男性が前に出た。
女性はさらに俺に近付き、深い紺色をした瞳でジッと見つめてくる。

素朴な可愛らしい顔立ちに、少し赤みを帯びた肌。
ピアスだろうか、金属製の大きな耳飾りが揺れ、光を反射した。
「噂どおりのお美しさで！　神秘的な白髪は輝くようですし、瞳はまるで可憐なスミレの花のようです！」
女性は息も吐かずにそう言いきった。やっとのことで、自分に話しかけられていることを理解する。
「よくぞ我が国、ラムダ帝国へいらっしゃいました、聖女様。我ら一同、心よりお待ちしておりました。私は宰相のウィンスと申します。以後お見知りおきを」
「長旅でさぞお疲れでしょう。ウィンスが応接室にご案内いたしますので、ゆっくり休まれてくださいませ」
女性と禿げ頭は満面の笑みを浮かべ、深くお辞儀をした。反射的に返事をしようと口を開くが、言葉が出てこない。
結局パクパク、と魚のような間抜けな表情をしただけで終わった。
「ささ、どうぞ中へ」
スッ、と目の前に手を差し出される。
どうやら手をお取りください、ということらしい。
一応敵国に来ているわけだし、そこは用心して、手を取るなんてことはせず、ひょいと

馬車から飛び降りた。
ウィンスと名乗った女性は、終始ニコニコと、悪く言えば胡散臭い表情をしながら、俺を城の中へと案内した。
促されるままに応接室へと通され、椅子に座る。
机の上には、紅茶まで用意されていた。
椅子は相当高級なもののようで、豪奢な装飾が施されている。行きに乗ってきた馬車とは比べものにならないぐらい座り心地がいい。
「改めまして、ようこそ我が国へお越しくださいました。私は宰相を務めております、ウィンス・リルダンと申します。初めまして聖女様」
ウィンスさんは無駄のない上品な所作でもう一度お辞儀をした。
また何か言われそうだったので、その前に急いで口を開く。
「あ、あの！」
緊張していたせいか思ったより大きい声が出てしまい、応接室に自分の声が響いた。
「その、お話がありまして。何から言えばいいのかわからないんですが、とりあえずその『聖女様』っていうの、なんですか？」
言葉を選びながら慎重に質問する。ウィンスさんはきょとん、といった効果音が誰よりも似合いそうな表情をした。

「聖女様は聖女様ですよ？」
話が通じない。俺は心の中でガクッと項垂れる。いや、もしかしたら実際に項垂れていたかもしれない。
「だから、その聖女っていうのがなんなのかわからないんです……」
「何をおっしゃるんですか、あなたこそ聖女様でしょうに」
薄々感じてはいたが、何かの比喩ではなく、ウィンスさんにとって俺は聖女そのものであるらしかった。
話が通じなすぎて、頭痛までしてきた。
「あなたにとって僕は聖女みたいですけど、絶対に違うと思うんですよ……」
俺は自分のことを聖女だと名乗ったり、思ったりしたことなんて一度もない。
もし俺が厨二病で妄想をするにしても、もっとかっこいいものにする。そもそも男だし、『聖者』ならまだしも『聖女』だなんてありえない。
何かの間違いに決まっている。
「またまたご冗談を。聖女様はユーモアのセンスもおありなんですね！」
だめだ。もうこの人には何を言っても通じない。
「その透き通るような白髪と、紫色の瞳。そして何よりその強さこそ聖女様の証です！」
なるほど。白髪に紫の瞳で王都の危機を救った子供。確かに聖女の証とやらに俺はばっ

ちり被っている。
帝国は聖女の証を持つ子供の噂を聞きつけ、王国に攻め込んだのだろうか。隣国を脅してまで手に入れたいほど、その『聖女様』とやらは大事な存在らしい。
だがいくら条件に当てはまっていようと俺は聖女ではないのだから、さっさと誤解を解いてしまうのがお互いのために一番いい。
でも、話が通じないんだよなぁ……
目の前でペラペラと聖女について語り始めたウィンスさんを見て、ため息が出そうになるのを抑える。
「聖女様が我が国に来てくださるなんて、こんなに嬉しいことはございません！」
ウィンスさんは聖女様、つまり俺に何度もお世辞を言った。
狂信者のようで恐怖すら覚える。
いい加減にしてくれと言いたかったが、そうするわけにもいかず、俺はただふかふかな椅子に座っていることしかできなかった。
「聖女様がいらっしゃるなら、我が国も安泰でございます」
「だから、僕にそんな力はありませんって、聖女じゃないし」
否定するのも疲れてきた。ああ、できることならさっさと逃げ出したい。
前世での、校長先生の長話よりも退屈で、上司の叱責より苦しい。ウィンスさんは人に

不快感を与える天才ではなかろうか。
俺は天井のシミを数えながら、そんなことを思っていた。
「聖女様がいらっしゃれば、来る『災厄の日』も安心ですね」
「……『災厄の日』？」
聞き返せばさらに話が長引くであろうことはわかっていたが、思わずそう尋ねてしまう。
何やら物騒なワードだ。
「言い伝えにある、千年に一度やってくる恐ろしい日のことです。ああ、考えるだけで震えが」
ウィンスさんは考えたくない、といった風に頭を振った。
「そ、そんなにとんでもないことが起こるんですか？」
「ええ、ええ。それは世界の終わりとでも言うべきほどの……」
ウィンスさんはまるで実際に見たかのようにそう言った。
それほどまでに『災厄の日』というのは恐ろしいものらしい。そうだとしても、ただの言い伝えにそこまで怯えるのもどうかと思うが。
具体的に何があるのか知りたかったが、ウィンスさんはそれ以上話そうとしなかった。
「その『災厄の日』っていうのは、何年ぐらい前に来たんですか？」
「正確なことはわかりませんが、今からおおよそ千年前でございます」

千年前。数秒ほどフリーズしていただろうか。やっと脳がその言葉の意味を理解して、俺は軽く叫んでしまった。

「……千年前!? さっき千年に一度って……じゃあ、もうすぐ来るってことですか!?」

ウィンスさんはこくりと頷いてた。

言い伝えが本当ならば、その世にも恐ろしい『災厄の日』とやらがもうじき来てしまうのか。千年という大きなスケールで現実味がなかったが、一気に実感が湧いてくる。

「でも大丈夫です！ だって聖女様がいらっしゃるのですから！」

ウィンスさんはさっきまでの怖がっていた様子から一転、また笑顔に戻ってそう言った。

やけに『聖女様』は信用されているらしい。

「千年前の災厄のときも、我らを、世界を救ってくださったのですから、きっと今回も大丈夫です！」

なるほど、それで信用されてるのか。

他人事ならそんな風に思うだけで終わった。

しかしウィンスさんの中で『聖女様』イコール俺なのだ。つまり俺が『災厄の日』をなんとかできると思われている。

なんてこったい。

特徴が一致していて少々強いだけで、そんな恐ろしいものをどうにかできるわけがない。

責任を俺に背負わせないでくれ。

しかしこれで合点がいった。

帝国が攻め込んでまで白髪に紫色の瞳を持つ子供、すなわち『聖女様』を手に入れたがっていたのは、来る『災厄の日』に備えてのことだったらしい。

千年に一度レベルの災厄をどうにかするためなら、多少無茶してでも『聖女様』を手に入れたいのは理解できる。

それにしても、『災厄の日』も『聖女様』も初めて聞いた。

帝国でここまで恐れられているならば、隣にあるアドラード王国にもそういう言い伝えがあってもおかしくないのに。

ウィンスさんはそれから随分と長い時間、聖女と『災厄の日』について話し続けた。もはや洗脳の域である。

しかしウィンスさんは千年前の『災厄の日』に何があったか、そしてそのとき聖女がどうしたかについては話そうとしなかった。

ほとんどは俺に対しての賞賛で、つまりなんの情報にもならない。

長時間俺に対する根拠のない信頼を浴びせられ続け、ノイローゼになりそうだった。

「はっ！ 聖女様がお疲れのことをすっかり忘れていました！ つい長くなってしまって……今すぐお部屋へご案内いたしますね」

早く解放されたいと願っていると、ウィンスさんは思い出したようにそう言った。
ウィンスさんの話を聞いて、『災厄の日』やら聖女やらについて考えたせいで、体だけでなく頭まで疲れた。
そして、一つわかったことがある。いくら高級な椅子でも、長時間座っていればお尻が痛くなる。
俺はまたもや痛むお尻をさすりながら、案内をしてくれるウィンスさんについていった。
「聖女様のお部屋は、この廊下を進んだ突き当たりにあります。本日はゆっくりお休みくださいませ」
ウィンスさんは一礼してから、足早に去っていった。
廊下はいくつも分かれ道がある。
この城はかなり入り組んだつくりをしているようだ。忘れてしまわないうちに、ウィンスさんが示した廊下のほうに足を向ける。
「聖女様がいらっしゃったのなら我が国も安心だな」
歩き出そうとしたとき、自分を指すであろう『聖女』という呼称が聞こえ、足を止めた。
どうやらこの枝分かれした廊下のどこかから聞こえるようだ。
続いて数人の同意する声が聞こえてくる。
声のするほうに歩いていくと、部屋の中で何やら会議をしているようだった。

馬車を降りるときにウィンスさんと一緒にいた禿げ頭の声もする。
ウィンスさんが言っていたことと同じような内容だ。
この先に続くことも、さっきウィンスさんが話していたことと同じようなものだろうと、興味を失いかけたところで、また別の声が聞こえた。
「しかし、皇帝陛下がおられないのでは……」
皇帝陛下。いわずもがな、ラムダ帝国を治める人物のことだ。
その一番大事な人物がいない？
ウィンスさんの話の中には出てきていなかった内容に、思わず興味を引かれる。
俺はさらに耳を澄ました。なんだか最近盗み聞きばかりしている気がする。
「もう一週間もお戻りになっていない。聖女様がいらっしゃったとしても、やはり……」
「自国を見捨てたお人なんてもういい！　今我が国に必要なのは聖女様だ」
「そんなこと誰かに聞かれたら――」
皇帝陛下が、いない。衝撃的な事実を、脳内で反芻する。
確かに宰相であるウィンスさんにあれほど歓迎されたのに、皇帝陛下は会うどころか、話にすら出てこなかった。
しかし、あの男性の言うとおり、国のトップである皇帝がいないのでは、たとえ聖女がいようと、上手く『災厄の日』を回避できないのではなかろうか。そもそも俺は聖女じゃ

ないからそんな力もないのだ。ますますだめだ。

どうやら俺は、とんでもない国へ来てしまったらしい。

「それはそうと、聖女様はあれでいいのか？」

先ほど話していたのとはまた別の人物がそう言った。

あれでいい、とはどういうことだろう。俺はまだ問題行動をしたつもりはないぞ。比較的礼儀正しくしていたはずだ。

「牢にも入れずに随分自由にさせているようだが、ウィンスは何を考えているんだ。あまりに適当すぎる。聖女様は重要な存在なのだから、もっと厳重に管理すべきではないのか」

『管理』という言葉に、ゾッと鳥肌が立つ。この人たちは、俺のことを利用価値のある『もの』としてしか見ていないのだ。

俺が呆然としている間にも、『管理』の方法が次々述べられていく。

初めのうちは監視や軟禁など控え目なものだったが、話が進むにつれその内容は過激になっていった。

地下に監禁する、足を切断する、舌を切る、目をくりぬく。どれも非人道的な行為だが、それを喜々として語っている。

聖女がいる国には、繁栄が訪れる。言い伝えにはそんな内容もあるらしい。

聖女を求めた真の理由は、『災厄の日』から国を救うなんてことではなかったのかもしれない。話を聞いていると、帝国で聖女を独り占めしたいと思っていることがヒシヒシと伝わってきた。

ウィンスさんの話によると、かつての聖女は、世界を『災厄の日』から救ったのだ。どの国にいようと問題はないが、聖女の恩恵を独占しようとするのはよくない。

音を立てないよう細心の注意を払いながら、素早くその場を離れ、用意された自分の部屋へ向かう。

無意識に息を止めていたことに、部屋の扉を閉めて初めて気が付く。

体が震えている。

よし、逃げよう。心の中でそう呟く。

ここにいたら危険だと、俺の本能が警鐘を鳴らしている。

あんな考えをしている人の近くにいると考えるだけで悪寒がするし、いずれさっきの話どおりにされる可能性だってある。

俺を引き渡すのが攻め込むのを中止する条件なのだから、その俺がいなくなったら争いに発展するかもしれない。

けれどあの話を聞いてしまった以上、笑顔でここにい続けられる自信はない。

決断さえすれば、逃げるのは簡単だ。転移魔法を使えばいいだけなのだから。

王国の、家族が待っている自分の家を思い浮かべる。
そして魔法名を唱えた。
しかし、いつまで経っても周りの景色は変わらない。もう一度試しても同じだ。
そこで俺はやっと、魔法が使えないことに気付いた。いつまで待っても、魔法特有の魔力が抜ける感覚がないのだ。
何故魔法が使えないのかはわからないが、これでは逃げることができない。それどころか、魔法が使えないのでは、俺は無力な五歳児である。
冷や汗が額を伝う。
「……落ち着け俺」
そう自分に言い聞かせ、数回深呼吸する。
原因がわからないことには対処しようがない。
それを探るべく、自分と城周辺の魔力に意識を傾けた。その瞬間、すさまじい密度の魔力に圧倒される。
通常、魔力は一定の濃度で空気中に存在しているのだが、この辺り一帯の魔力が急激に増幅し、魔力の濃度がめちゃくちゃになってしまっているようだ。
通常感じることのないほどの魔力を感じてしまったせいか、頭がズキン、と痛む。
何故、どこから生じているのかまでは感知できないが、それはもう大量の魔力が城の周

りのあちこちで発生している。
どうやら魔法が使えない原因はこれで間違いない。
大気中と体内の魔力は密接に関係しているため、大気中の魔力が乱れると体内の魔力をコントロールするのも当然難しくなる。
魔力をそのまま放出するくらいならできなくもなさそうだけど……属性を付与したり、攻撃に変換したり、魔力の緻密なコントロールが必要な魔法は、この状態で発動するのはおそらく無理だ。
そういえば、以前似たようなことがあったような……
過去の記憶を思い出してみると、すぐに思い当たる出来事が見つかった。
王都での緊急事態だ。
以前アドラード王国の王都で魔物の大量発生が起こった。
確かあのときも、王都に異常な魔力反応があったと学園長が言っていたはずだ。詳細は聞いていないが、きっとあのときと同じような状況なのだろう。
王都のときはここまでひどくはなかったから、まだ魔法が使えたけど……今回は魔法が使えないほど魔力の乱れが生じてしまっている。
あのときは、発生した魔力をもとに、大量に魔物が出現した。同じことが起こると考えて間違いない。

「嘘だろ……」

こんな異常事態が、同じ大陸で立て続けに起こるなんて、どういう確率だよ。

そんなことを考えていると、廊下からバタバタと騒がしい足音が聞こえてきた。

行ったり来たり、大勢の人たちが忙しなく移動しているようだ。帝国も、このとんでもない魔力に気が付いたのだろうか。

王国での一件は各国に共有されているはずだし、これから先に起こる事態を予想したのかもしれない。

こんな状況では、逃げることなんてとてもじゃないができない。

窓から外を覗いてみたり、部屋の中をウロウロしていると、突如窓から見えていた裏庭一帯が真っ暗になった。

「え？」

ビリビリと空気を震わせるほどの衝撃と大きな音が辺りに轟く。立っていられなくなり、慌てて床に伏せた。一体何が起こったのか。

衝撃が収まってから、そっと外を覗く。

城を囲む塀は跡形もなく崩れ、その奥の森は、木が倒れ地面は抉れ、見るも無残な姿になっている。

そしてそこには、深い赤色の艶やかな鱗に覆われた、美しい巨大なドラゴンが横たわっていた。

「ウォン⁉」

驚いてそう叫ぶ。今目の前に横たわっているドラゴンは、確かに以前魔の森で出会ったウォンだった。

俺が名前を呼ぶと、ウォンは『うむ』と言いながら頷いた。横たわりながらなので、首の動きは申し訳程度だったが。

『久しいな、エルティード』

地響きのような低い声で、巨大なドラゴンはそう言った。

いつか魔の森で出会ったウォンが、何故ここにいるのかわからず混乱する。

『ちと上空を散歩していたのだ。だが急に魔力が乱れたせいで、驚いてバランスを崩し、落ちてしまってな。ガハハ！　ドラゴンも空から落ちるってところか』

ウォンは豪快に笑いながら、そう説明してくれた。猿も木から落ちるじゃあるまいし。こっちの世界には、そんなことわざがあるのだろうか。

あと、ドラゴンが上空を散歩するなんて大丈夫なのかよ。こんな巨大な魔物が空を飛んでいたら、きっと皆、気が気でないだろう。討伐しようとする人もいるかもしれないし。

ウォンは体についてしまった土や葉を体を揺らして払いながら、ゆっくりと起き上がった。

それと同時に、廊下からまた足音が聞こえてくる。この騒ぎを聞きつけて、誰かがやってきたらしい。

ウォンは一応魔物だし、危険とみなされて討伐されたらどうしよう……そんな考えが頭をよぎるが、この巨体をどこかに隠せるはずもない。

ウォンを逃がす間もなく、部屋の扉が勢いよく開けられた。

「聖女様、ご無事ですか⁉　ものすごい衝撃と音がこちらから――」

ウィンスさんが、長い髪を揺らして部屋に飛び込んできた。

そして、窓の外を見て絶句する。それはそうだろう、こんなに大きくて立派なドラゴンなんてそうそういない。

『おや？　エルティードの友人か？』

ウォンは呑気にそんなことを言った。

おい余計なことを言うな、人語を話す魔物とか、しかも俺のことを知っているなんて、もっと混乱を招くだろ。

ちらりと隣にいるウィンスさんの様子をうかがうが、予想どおり戸惑いと驚きを隠せないようだった。

「人語を話す、赤い鱗の巨大なドラゴン……」

ウィンスさんはぽそりとそう呟いた。

「やはりあなた様は、聖女様でいらっしゃるのですね！」
「はい？」
瞳をキラキラさせるウィンスさんに、意味がわからずそう聞き返す。
「まさか伝説のドラゴンまでお連れになっていたとは。私、感激いたしました！」
ウィンスさんは俺を無視して、早口で聖女の言い伝えについてまた話し始める。
要約すると、どうやら千年前の聖女は、人語を話す、赤い鱗の美しい巨大なドラゴンを引き連れていたらしい。
それでウィンスさんは、ますます俺を『聖女様』だと思い始めたようだ。
ウォンはそんなウィンスさんと困る俺を、興味深く観察している。
見ていないで助けてほしい。
「そうだ、こんなことを話している場合ではありませんでした。私はひとまず失礼いたします」
ウィンスさんは早口で告げて、慌ただしく退室していった。
この異常な魔力の対処に追われているのかもしれない。それともウォンの存在を報告しにいったとか。
とりあえずウォンが危険視されなくて安心した。長話から解放されたこともあり、ホッと息を吐く。

「そうだ。ウォン、怪我はないか？」
窓から身を乗り出して、ウォンにそう問いかける。
『これくらい、痛くもかゆくもないわ。我はドラゴンだからな』
それならいいが。
また魔の森で出会ったときのような大怪我をしていても、今は魔法が使えないから治してやれないのだ。
『それにしても弱ったな。この魔力の乱れでは、飛行するのに集中力がいるではないか』
「集中すれば飛べるならまだいいじゃないか。僕なんか魔法が使えないんだぞ、ただの無力な子供だ」
ウォンはわかっているのかわかっていないのか、フムフムと言いながら話を聞いていた。
『そういえばエルティードは何故こんなところにいるのだ？』
「大人の事情ってやつだよ」
『エルティードは面白いことを言うな』
子供の姿の俺が大人の事情と言ったのがおかしかったのか、ウォンは豪快に笑っている。
「それより、魔力が乱れているってことは、魔物のウォンにも何か悪影響があるかもしれないし、早く帰ったほうがいいんじゃないか？」
『その心配はないぞ！　これだけ魔力が増幅すれば、魔力を動力源としているそ

こら辺の魔物は悪影響どころか、より強力になるわ。我も若干体内の魔力量が上がってはいるが、元々魔力量が多いからあまり変わらん。我らのような高等な魔物は、魔力を感知する能力が高いから、気が散ってしまって大変というのはあるが……まぁ強き者の定めというものだな！』

ウォンはえっへん！　といった風に胸を張ってみせた。

そういえば、王都の魔力異常のときも、魔物はピンピンしているどころか、増幅した魔力で強力になっていたな……

それにしても、最初に会ったときは怖い印象を受けたが、こうして話してみるとウォンは随分子供っぽい。

『懐かしいな。かつてこの辺りで大暴れしたことがあった。そのときあやつにこっぴどく叱られて……ああ、今思い出しても恐ろしい』

何を思い出しているのか、ウォンはそう言って身震いした。

『そういえば、お前はあやつによく似ているな』

「あやつ？」

『うむ。お主と同じように白髪に紫色の瞳をしておった』

「それって――」

まさか、かつての聖女？

白髪に紫色の瞳だなんて珍しい特徴を持つ人は、聞いたことがある中で俺以外に一人しかいない。

いや、正確には転生するときに不思議な空間で出会ったあの少女がいるので二人かもしれないが、あの子は多分神様的存在だし、地上にやってくることはないだろう。

言い伝えでは、かつての聖女は、人語を話す赤い鱗の巨大なドラゴンを引き連れていたとウィンスさんが言っていた。

もしそれがウォンだったのなら、話の辻褄が合う。

「なぁ、ウォン、それって何年ぐらい前の話なんだ？」

『あやつに怒られた日か？　五百年、いや千年……いや三千年かもしれぬ……』

「とにかく遠い昔っていうのはわかった」

それとウォンの記憶が当てにならないことも。

「それにしてもこの魔力の乱れ、一体何が起こってるんだろうな」

『知らん』

ウォンは間髪を容れずそう言ってきた。お前には聞いていない。ただの独り言だ。

もしかして、これは『災厄の日』に何か関係があるのではないか。

ふとそんなことを思いついた。

ウィンスさんが教えてくれなかったので詳細はわからないが、災厄というからには人間

にはどうにもできない現象なのだろう。だとしたら魔力によるもの、という可能性もある。
もうすぐ『災厄の日』がやってくるのなら、今こうして異変が起きたっておかしくはない。
ウォンに聞いてみようかと思ったが、今さっき『知らん』と言われたところなのでやめておいた。それにこいつの記憶は本当かどうか定かじゃない。
なんだか妙な胸騒ぎがする。
「なぁウォン、僕ウィンスさんのところへ行ってくるから、ちょっとおとなしくしててくれるか？」
下手に動かれたりしたら、余計な騒ぎになりそうだと思い、そう言い聞かせる。
ウォンは頷いた。
ウィンスさんに聞いて、この魔力の乱れと『災厄の日』の関係性について知ったところで、一体何になるのだと自分でも思う。
でもこんなに胸騒ぎがしては、じっとしてはいられなかった。
それに、魔法が使えなくとも体力回復のポーション作りとかなら役に立てるかもしれない。
ウィンスさんは宰相と言っていたから、この事態の対処に忙しくしていることだろう。
まぁ邪魔になりそうだったら、さっさと帰ってくればいい。

そんな軽い気持ちで、広い廊下を歩いていく。
廊下には沢山の人が激しく行き交っていた。皆書類や荷物を抱えて忙しそうに動き回っている。
たまにチラッと俺を見る人もいたが、足を止める人は一人もいない。
執務室らしきものは案外すぐに見つかった。人が忙しなく出入りしている。
出入りする人にガン見されながらも、人と人の間を縫ってどうにか執務室に入る。
ウィンスさんは次々と運ばれてくる書類に片っ端から目を通し、入れ替わり立ち替わりやってくる人に指示を出したりしていた。紛れ込んで侵入してきた俺に気付く暇もないらしい。
やっぱり迷惑そうだから帰ろうかな……
外に出るか、声をかけるか逡巡していると、見覚えのある禿げ頭がやってきた。
聖女様の自由を奪おうだの閉じ込めようだの、物騒なことを言っていたうちの一人だ。
最初に会ったときは愛想よく優しそうだったくせに、俺のいないところであんなに恐ろしいことを言っていたなんて、人を信用できなくなりそうだ。
恐怖がぶり返して、体が震えそうになるのを気合いで抑える。
そのまま通りすぎるのかと思ったが、その人は他の人とは違い、俺の目の前で立ち止まった。

ツルピカの禿げ頭だぁ～、まるでゆで卵みたい！　なんて脳内で悪口を言って恐怖を誤魔化そうとするも、あまり効果はなかった。

ゆで卵は俺の身長に合わせて屈むと、ニッコリと笑った。

「聖女様、こんなところで何をしておいでで？」

「えっと、ちょっとウィンスさんに用事がありまして」

「ほほう、そうでありましたか。申し訳ないのですが、ご覧のとおりウィンスは忙しくしておりまして。伝えておきますので、なんの用事か教えていただけますかな？」

不気味なほどにニッコリ笑っているのが怖くて、脳内で必死にゆで卵に変換する。

用って言われても、この用事をどう説明しろと。

なんか魔力が大変なことになってるんですけど、これって『災厄の日』と関係ありますの？　って聞きにきたって言えばいいのか？

でもだからなんだと言われてしまったら困る。『自分ポーション作りとか得意なんで、お役に立てるかもっス☆』とか出しゃばりっぽいし、恥ずかしすぎて言えない。

「……早くしてもらえますかな。我々も忙しいのです」

「す、すみません。ウィンスさんにお聞きしたいことがあっただけなんです」

「どのようなことで？」

しつこいぞゆで卵！

立ち読みサンプル
はここまで

「その、今魔力が乱れて大変なことになってるのが、『災厄の日』と何か関係があるんじゃないかと思いまして、それを聞きに……こんな風に魔力があちこちで増幅して、濃度がめちゃくちゃになってしまうなんて、きっとただ事じゃないですよね？」

小さな声で、「僕、ポーション作りが趣味で、もしかしたらお役に立てるかもと思いまして……」と付け加える。

『お役に立てるかもっス☆』を限りなくマイルドにした形である。

恐る恐る顔を上げてゆで卵の様子をうかがうと、ゆで卵はゆで卵ではなくなっていた。

驚いた表情をしたことにより額に皺が寄り、ツルツルじゃなくなったからだ。俺の脳内のゆで卵フィルターはそのせいで取れてしまった。

「何故、魔力の状態をそこまで詳しく……」

「え？」

「いえ、なんでも。ここは騒がしいですから、どこか別の場所でお待ちになっては？　ウィンスには私が伝えておきます故」

遠回しに出ていけと言われてしまった。

まぁこれ以上邪魔をするのも申し訳ないので、とりあえず言われたとおり別の場所へ向かうことにした。

ゆで卵はあとをついてきたりする様子はなく、ホッとする。